リレー訪問 ファームマンの誇りと夢

第2回(前編):誰でも就職できる農業とは…の巻

産業、事業としての農業には、優秀な人材が不可欠。次世代を担う農業就職者「ファームマン」はどんな夢を見るのか。リレー対談第2回は、㈲ソメノグリーンファームに勤める廣瀬豊彦氏が㈲あぐり信州に勤める矢野智氏を訪問。前編・後編の2回に渡って紹介する。

廣瀬豊彦（以下、廣瀬）　いきなりですが、矢野さんは年間で何日くらい休みがとれてますか。僕の方は、冬は休めるだろうっていう期待を持って就農したんですけど、何だかんだ作業があってなかなそうもいきません…。

矢野智（以下、矢野）　うちは露地野菜を作っているので、1月は作業がなくて休めるんですよ。播種が始まる2月ごろまではゆっくりできます。その代わり、夏は忙しくて休む暇はないですね。給料は夏も冬も同じ額で、夏はどんなに残業をしても給料は変わりません。

廣瀬　冬に1ヵ月休めると思えばがんばれるものですか。

矢野　私はがんばれますけど、誰もがそういうわけじゃないですね。やめてしまう人もいます。

廣瀬　そこですよね。覚悟ができている人しか続かない。うちは人の出入りが多いわけではないけど、やめられるとやっぱり寂しいですね。入ってくる人を選ぶときには、それに絶えられるだけの人かどうか、どれだけ覚悟があるかをかなり吟味しないといけない。

矢野　そうですよね。そのためにうちでは応募者に作文を書いてもらってるんですよ。

廣瀬　ホントですか。作文のテーマはどういったものですか。

矢野　うちはおっかないですよ。テーマは「働く意義」（笑）。何のために働くのかということを自分自身に問い詰めてもらいます。

廣瀬　そのテーマは出されたくないですね（笑）。

矢野　内容だけで採用不採用の判断にすることはないんですけど、文書にはその人の〝地〟がでると思うんですよ。本人のモヤモヤしてる部分もでるし、決意を新たにできる利点もあります。社長の経営方針にも合っています。ただ言われたとおりにやってればいいというんではなくて、知恵を出し合っていこうよっていう、下から積み上げていく方針なんで、作文に書いた従業員の夢や希望がそのままうちの戦略にもなるんですよ。その人のいい部分を生かしてどういったサービスができるのか、どう責任の管理をするのかにも生かせます。どういう会社にしていくのかっていう形づくりに、その作



今月のゲスト

廣瀬豊彦(41歳)

出　　身：神奈川県横浜市
所　　属：㈲ソメノグリーンファーム
雇用形態：月給制
備　　考：1964年生まれ。造園土木業を経て1996年より現職。同社生産部バレイショ担当。



今月のホスト

矢野智（30歳）

出　　身：愛知県刈谷市
所　　属：㈲あぐり信州
雇用形態：社員
備　　考：名城大学農学部卒。脱サラし、1999年から長野県の野菜農家でアルバイト。2003年(有)あぐり信州に転職し、現在、経理から栽培管理までを担当。

文を活かしますよっていうことで、書いてもらってるんです。

廣瀬　僕だったらこういうことができる、こういうことがしたいっていう。

矢野　それ以外にも、何で農業を選んだのかっていう動機やうちで何がしたいのか、どういう強みがあるのか、人生でどういう夢を叶えていくのかっていうことを書いてもらうんですよ。これをお願いすると返事がくる人こない人がいるんで、ここで随分わかりますよね。

廣瀬　なるほど。でも、やる気のある人が経営のなかで使える人材かどうは、また別ですよね。その辺が難しい。

矢野　たしかに。でも求人するにも準備やら出費やらがあるわけなんで、最低条件は逃げ帰らない人。一般企業並に応募者が集まればいい人材も見つかるんだろうけど。それには、休みは夏でも月に2回とか、年間何日とか確実にとれるようにしていかないといけないだろうし、給料の払い方もきちんと決めておかないといけない。

廣瀬　筋が通っていれば働く人はやる気が保てる。

矢野　それと福利厚生が完備されているところも少ないですよね。冬に東京と大阪でやった農業人フェアに参加したんですけど、条件は労災とよくて雇用保険。

廣瀬　労災は罰則があるから入っているはず。

矢野　雇用保険なしで正社員の募集をしているところは法人義務違反なんだけど、そういうのは応募する人にとってはどうなんだろうと思いますね。

廣瀬　そんなところから、農業界全体がまた未熟なのかなって思ってしまいます。応募する人も農業界はその程度の業界なんだっていう目線で入ってくるんでしょうね。そうだとしても覚悟して入ってこれる人じゃないと続かないですね。

矢野　廣瀬さんはどういった人に入ってほしいですか。

廣瀬　経営者としては自分の右腕になってくれる人が欲しいんだろうし、雇用される身としては作業がラクになるような人が欲しいところなんでしょうけど、でもこの2つは相反するものではなくて、いい人っていうのは、この両方を満たす人だと思います。そういった人はただの労働者としているだけではつまらないだろうし、待遇だけを考える人ならわざわざ農業にこだわらなくてもいいはずです。矢野さんはどうして農業なんですか。

矢野　農業の魅力ですね。僕の場合は、職人に憧れていたのが大きいと思います。育児をするのにも、こういうところで暮らしていけるのは理想的。なにより不安定な職業需要のなかで、農業は人の命を支える食の根本の職業であると誇りを持っています。

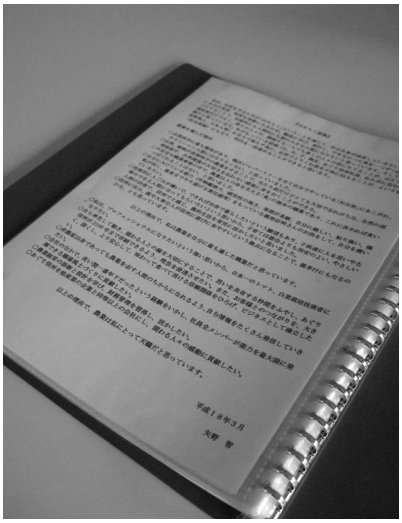
廣瀬　生産効率を考えたら、やっぱり分業化になると思いますが、農業ってそれができないじゃないですか。それが逆に魅力なのかな。つまり全体像をみて仕事ができる。ましてや、来年のことまで考えて土づくりとかしてるわけだし。これを喜びと感じるような人が、農業法人に勤めにくるんじゃないでしょうか。

矢野　土作りや種まきから始まって様々な栽培管理がありますが自分が生産しているものとして、作物を最初から最後まで見届けられるというのも魅力です。

廣瀬　しかし、まだまだ、だれもが就職できる職種とは言えないのが現状ですが…。どうすれば農業界で求人に100人集められるだけの魅力をもたせられるのでしょうか。

矢野　やはり、事業としてちゃんと儲けられるようにならないと企業としては受け入れてくれない。

廣瀬　それが企業の大前提ですよね。（続く）　（まとめ・高橋瑞穂）



「働く意義」をテーマに作文を書くことで、自分の考えを整理



代表者

㈲あぐり信州代表取締役

篠原好明 氏

法人化したきっかけは、欲しいと思った人材に「厚生年金や社会保険が整っていないから」との理由で断られたのがきっかけ。農業は作業内容が幅広く、熟練を要する仕事が多いため、人材を育成するには周年雇用が必要と考え採用している。ハクサイ8ha、キャベツ4haのほか、ハナマメ、トマト、キュウリ、ナガイモなども栽培。